

市長の伊賀じまん

一洋画のまち 伊賀一



▶ 濱邊萬吉さんのデザインによる観光パンフレット



伊賀は、文化・芸術に大変熱心なまちです。江戸時代には、絵師として池田雲樵や大北珉堂らが活躍し、藤堂藩の藩主自らも絵を描くなど文化的な活動が盛んでした。明治になるとそこに西洋からの流れで油彩が加わり、昭和初期には伊賀上野は「洋画のまち」と呼ばれるようになっていました。当時は、多くの画家が帝展（帝国美術院美術展覧会）に連続して入選するなどめざましい成果をあげた時代でした。

伊賀で洋画家として先駆的な役割を果たした人物に奥瀬英三さん（5代目上野市長奥瀬平七郎さんの



▲本庁舎に飾られた元永定正さんの作品

叔父)がいます。その門下生で「蒼丘社」というグループの一人である濱邊萬吉さんを知る人も多いのではないのでしょうか。彼は愛宕町の郵便局長を勤め、帝展への入選も果たし、のちに観光パ

ンフレットなどのデザインを多く手がけました。彼の弟子の元永定正さんは、伊賀から世界へ活動の場を広げて活躍されました。近年、元永さんの絵の評価が高まっていることは非常に嬉しいことです。

また、蒼丘社の中には、中学生のとき帝展に入選し、後に画家として活躍した松浦莫草さんがいました。その弟子である森公美さんは先日、創造美術大賞を受賞されました。

市内でも市民団体による美術サークル活動などが大変盛んで、再び伊賀の地に芸術が花開こうとしています。

ただ、こうして先人たちが成しえてきたものを常に身近で感じられる場所がまちの中にあることは非常に残念なことです。伝統をさらに深め、市民をはじめ多くの人たちが交流できる場所や地域づくりに役立てられる場所づくりが必要だと感じています。世界中の人たちに誇れる作品がこのまちにはたくさん残されているのですから。（伊賀市長 岡本 栄）

伊賀市の文化財 102

国登録有形文化財（建造物）

料理旅館 梅家（平田）

伊賀街道は、古くは「伊賀越奈良道」と言われ、津から長野峠を越えて、伊賀・奈良へと続く街道で、京・大和・山城方面と伊勢神宮を結ぶ参宮道の一つでした。藤堂高虎が伊勢・伊賀2国の大名となつてからは、2つの城下を往復する重要な街道として整備され、この地は平田宿として、明治初めまで「車や」「わたや」「たるや」などの旅館がありました。

梅家は、築後100年を経過する建物で、明治期より料理旅館を経営し現在に至ります。木造瓦葺き2階建て、入母屋造りで下屋（小屋根）のある平入りの建物は、東西間口七間、南北奥行き四間の大きさです。玄関の戸にはめ込まれたガラスには「旅館梅屋」の文字が入っており、屋号の梅家と異なりますが、宿泊部を梅屋、料理部を梅家と使い分けています。

下屋の東西には、創業当初から天女と鷹の鬼瓦が飾られ、当主の遊び心をうかがわせます。平田宿には、このような装飾瓦葺きの建物が多く残され、訪れる人の目を楽しませて

います。「イタマ」「ナカノマ」の建具は夏用と冬用で入れ替えられ、「イタマ」



▼下屋の鬼瓦



▶「イタマ」



▶「ナカノマ」「オクノマ」

には時代を感じさせる調度品、また創業時から引き継がれてきた九谷焼や輪島塗の什器のコレクションが展示されています。

「ナカノマ」と「オクノマ」から通りを眺めると、縦格子を通して街道を行き交う人々の情景を垣間見ることが出来ます。

梅家は、伊賀街道の宿場平田宿にあり、郷土の歴史的景観と風情を今に伝える貴重な建物として、平成28年2月25日に、国の登録有形文化財に登録されました。

文化財課

☎ 47・1285 FAX 47・1290